



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

お隣りさん —16歳—



## 松岡園子

「しょうがない奴やなあ」

隣のおっちゃんに言われた言葉が、ゆりの心を凍らせた。ダメな人間だと言われたような気がして、頭がぐらんぐらんする。

「シャッターぐらい、自分で閉め」

はい、と愛想笑いをして、ガレージから家の前に移動させた原付のエンジンをかけた。上がったシャッターの引っかけ穴を目がけて棒を持ち上げる。いつもは1回で穴にフックを引っかけることができるのに、今日は腕に力が入らない。背中におっちゃんの視線を感じる。早く、早くここから立ち去りたい。

「あんまり、お母ちゃん使ったらあかんで」

耳のあたりが熱くなる。わかってる、いや、わかってないかもしれない。

夏子が回復してきたことは、おっちゃんも知っているだろう。

母・夏子は、ゆりが物心ついた頃から、神戸にある家の一室で英語塾を開いていた。ひとりで40人余りの生徒をかかえ、毎日のように誰かが出入りしている家だった。夏子がゆりの相手をできない代わりに、祖父と祖母が父母役をしてくれた。お兄さんやお姉さんの笑い声、夏子がホワイトボードに文字を書いていくトントンという音、ゆりと話す時には使わない、低音でするするとした言葉。そうした日常の音と一緒にゆりは、教室とふすま1枚隔てて隣り合っている子供部屋のある家で育ってきた。

その家から音が消え、教室に誰も来なくなり、夏子の独り言が耳に届くようになったのは、祖父と祖母が亡くなって、ゆりが小学校を卒業した頃だった。独り言を話すばかりで何もできなくなった夏子と2人だけでの生活は無理だと考えた親戚が、ゆりと夏子を奈良県の家引き取った。しかし、ゆりは児童養護施設への入所が決まっていた。夏子と離れることに

納得のできなかつたゆりは、児童養護施設を何度か抜け出し、夏子と一緒に暮らすことを切望した。

そして話し合いの末、神戸の家に夏子と 2 人で戻ってきた。親戚には見放されるような形になってしまったが、ゆりには夏子や育った家から離れて暮らすということなど、到底考えることができなかった。

家事も自分の身のまわりのことも十分にできない夏子との生活は、大変なことも多かったが、地元の友達やその家族、近所の人などに助けをもらいながら、中学校 3 年間でなんとか乗り切った。そして、中学を卒業してからの進路は、働きながら定時制高校へ通う道を選んだ。16 歳の誕生日がきてすぐに原付の免許を取り、もらったお給料を貯めて、中古の原付を買った。それで通勤や通学をするようになってからは、電車とバスを使っていた時よりも、はるかに体の疲れが少なくなった。

やっとシャッターの穴にフックが引っかかった。勢いよく自分の方へ引き下ろす。シャッターが勢いよく地面にたたきつけられ、ガレージとの視界がさえぎられる。おっちゃんはまだいるのだろうか。原付のハンドルに手をかけると同時に、恐るおそる後ろを見してみる。もうおっちゃんはそのにはいなかった。隣からビール瓶の触れ合う音がする。おっちゃんは、もうお店の方に行ったのか。ゆりが仕事場へ向かう時間までは余裕があるはずなのに、ヘルメットをかぶろうとする手が焦っている。

「これ持って行き」

おっちゃんのいる方に背を向けて立っていたゆりがゆっくり振り向くと、オレンジ色の缶が 2 本、おっちゃんの手の中で並んでいた。

「1 本、お母ちゃんに持って行ってやり」

受け取った手のひらに、覚えのある冷たさを感じる。

「ありがとう」

小さい頃から知っている酒屋の冗談好きなおっちゃんだ。ゆりより 1 つ年下の春香ちゃんのお父さんでもある。よく遊んでもらったし、このオレンジジュースも、お店の冷蔵ケースから取り出したばかりのものをよくもらった。最近顔は合わせた時に挨拶するぐらいだけど、その挨拶でさえジェスチャー付きで冗談ばかり言って、笑わせてくれる。

「いつもシャッター閉めてくれてありがとうって言うんやで」

やっぱり、とゆりは思った。今までに見たことのない眼差しが突きささる。左胸の奥から大きな脈動を感じる。おっちゃんは店先で仕事をしながらいつも見ていたんだ。ゆりのいないガレージで 1 人シャッターを閉めている夏子と、それを見ているおっちゃんの姿が目につかぶ。ゆりが働くようになり、夏子も病院や福祉作業所に通うようになって、少しずつできることが増えてきた。だからそうしてしまったのだろうか。

「閉めといて！」

そう言いながら慌ただしく仕事場に向かう自分の姿、防寒着をはおった夏子が白い息を

吐きながら棒を持ち上げ、シャッターの穴を探っている姿が目の奥で繰り返される。調子の悪い時に夏子に代わってあれこれ気をまわしてきたせいも、ゆりが次にすることを伝え、夏子がそれに従うという形ができあがってしまっていたのかもしれない。

「自分でできることはお母ちゃん使ったったら、かわいそうや」

輪郭のはっきりしなかった形が、その言葉によって一瞬で姿を現した。なんて返したらよいかの思い浮かばない。微笑んでうなずいたつもりだけど、鼻の奥がつんとして、まともにおっちゃんの間を見ることできない。

「さ、はよ仕事いかな、遅刻するでえ。さあさあさあ！」

またいつものおっちゃんの間になった。腕時計の針は、7時を少しまわっている。

「おっはようさーん、お元気でっか？」

通りかかった人にそうして声をかけるおっちゃんの声が、冬の朝の空気を温めていく。ゆりは小走りでお家の玄関へ向かい、夏子の部屋に駆け込んだ。鏡台に向かって髪をとかしている鏡の中の夏子と目が合う。

「お母ちゃん、これ、隣のおっちゃんがくれた」

ジュースの缶を、こたつのテーブルに置く。次に言う言葉をどうしよう、でも、もう行かないと時間がない。

「あの、今日から自分でシャッター閉めるから」

夏子がゆりの方を振り返る。『いつもありがとう』が出てこない。たった8文字の言葉が意味を持つと言えない。視線を落とした先に、右手に握ったもう1つの缶が目に入る。缶に描かれたオレンジの絵に重なって、おっちゃんの間まっすぐな目が映る。

「今までありがとう、じゃ、行ってきます」

早口になってしまって聞こえたかどうかわからない。夏子の反応を確認することなく部屋から走り出た。

勢いよく玄関のドアを開けると、庭に植えてある梅の木に目がいった。枝に降りた霜に朝日が当たり、光っているように見える。こんなに綺麗なのに、今までよく見たことがなかったような気がする。ひとすじ指でさらってみると、固まっていた霜が雫になって指先で光る大きな粒になった。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。